

事例15

リスクアセスメントによる 高い安全意識で土木作業に取り組む

株式会社長瀬土建は作業の危険性を低減するためのリスクアセスメント手法を軸に、安全対策を実施。「決める・教える・守らせる」の視点から人材育成に取り組み、社員の意識を高めることで、事故ゼロに努めている。

株式会社長瀬土建・岐阜県

リスクアセスメントを起点に土木作業の危険を低減

株式会社長瀬土建は岐阜県高山市に本社がある土木・建設会社である。昭和34年の設立から50年超にわたって、岐阜県北部（飛騨）エリアで事業を続けている。業務内容は道路建設、舗装整備、一般土木、災害復旧治山工事など。平成22年からは林道整備、森林整備などの森林土木分野にも進出している。

土木作業では大型重機や各種電動工具を使用するなど、事故災害の危険要因は数多く、工事現場は傾斜地や軟弱な地盤を含む屋外であり、天候や害虫、害獣への配慮が必要な作業環境である。こうしたなか、同社は作業の危険を低減するため、10数年前からリスクアセスメント（以下RA）の考えを導入し、労働安全衛生に関するさまざまな取り組みを進めている。経営の基本方針にも「建設機械災害防止と、墜落・転落災害の絶無を目標に、業務に関わる全ての人、または職場における危険、さらに有害要因を特定し、評価し、その除去または低減に努める」ことを明言。そのPDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルを徹底することで、無事故無災害に努めている。

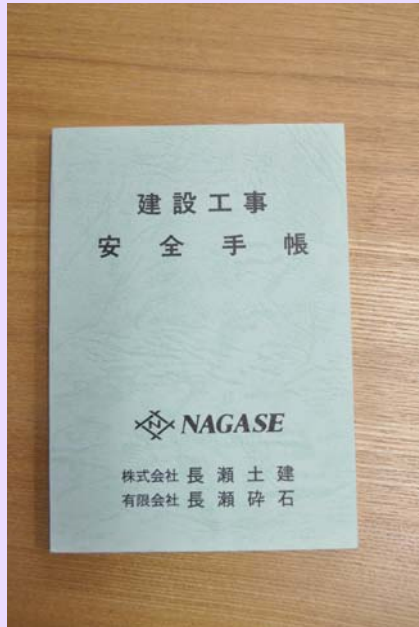
年4回定期開催の研修で安全への意識を高める

同社で安全対策を統括する社長は、「集合教育と現場での指導が安全教育の両輪です。教育の基本は、『決める・教える・守らせる』の徹底に尽きます」と話す。

集合教育で柱となるのが「安全大会」（6月実施）である。平成24年で、同大会による

安全大会

自社製の「安全手帳」



KY日報

KY日報		種別	種別
年度		年度	年度
月		月	月
日		日	日
1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	

KY日報

安全研修は38回目を数える。その内容は安全対策に関する講話、KYT（危険予知訓練）、各作業現場での安全対策の取り組み事例の発表など。そのほか同大会では、社員が考えたスローガンのなかから、年間と毎月の目標標語を決定している。

なお、同大会は全社員のほか、協力会社も参加し、テキストには安全活動と作業の基本が網羅された自社製「安全手帳」を使用している。

安全大会に加えて、3月、9月、12月にも全社員が参加する「安全ミーティング」を実施している。現場パトロールの報告、職長による安全への取り組みを発表し、各自が安全への意識を再確認する。

さらに、定期的な研修とは別に、新しい工事が始まるごとにRAの「周知ミーティング」を開き、全社員が作業とその安全対策に関する情報を共有している。RAによる危険低減活動に継続して取り組んできたため、今では全社員がRAの仕様書づくりで意見を出せるレベルまで成長しているという。

また、現場の安全対策がRAの計画通りに実行されているかを評価する「社内安全パトロール」を毎月1回実施している。社長、安全管理責任者が作業現場を見回り、危険作業や危険箇所などの再点検を行い、気づいた点を現場担当者に助言し、改善を図っていく。

KY日報や情報の「見える化」など、細部にわたり対策

作業現場では、RAのリスク低減対策に沿って、労働安全衛生に関するルールを細かく決め、作業者がそれを守りながら業務に取り組んでいる。

RAの一環として、作業現場で活用しているのが「KY日報」である。作業前、予想される危険に関して、危険ポイント、危険回避のための行動を日報に記入。ミーティングで作業の安全対策を確認した後に、1日の作業を開始する。また、現場作業者の健康状態は各自が記入し、作業への安全意識づけを図っている。

とくに重機（バックホー、ロードローダなど）を使う作業では、重機の旋回時などに注意を怠ると重大事故につながる危険性が高い。このため、重機周辺での作業時は「グープー運動」を実施している。これは重機近くの作業者が移動するとき、重機の運転者に手で「パー」を出して合図し、それを確認した運転手が「グー」を出して返事するもの。また、すべての重機に運転者の死角をなくすための後方モニター、および注意喚起用のスピーカーを設置している。

作業足場の設置では、より安全度が高い「手すり先行型足場」を積極的に設置している。安全最優先で作業環境を整えている。

現場で守るべき項目や注意事項は、「見える化」することで、作業者に情報を確実に伝達している。「たとえば、現場での危険箇所、注意事項は、イラストや写真で分かりやすくパネル表示しています。運搬用ケーブルの積載量では、重さだけでなく、“ブロック7個まで積載可能”など、具体的にパネルに掲載する。経験の浅い若手作業者を含め、誰が見てもすぐ理解できるように、現場での“見える化”を浸透させています」（社長）。ルールを「決める・教える・守らせる」には、情報（内容）を的確に伝える工夫も不可欠である。

ベテランが若手を指導し、さらなる安全をめざす

長瀬土建では、外部機関で行われる資格取得や安全講習などにも社員を積極的に参加させて、技量の向上と安全対策の強化を進めている。重機の安全講習には、運転担当者が重機メーカーに出向き、操作時の「死角体験」を実地体験するなどして、重機操作時に留意点を肌で再確認している。若手社員に対しては、職長などのベテラン社員が作業現場で指導する。

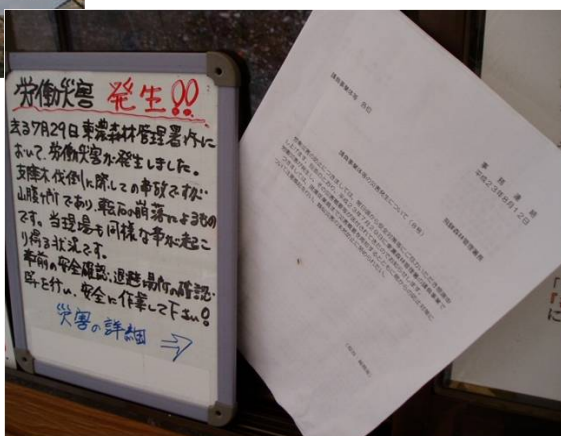
さらに、若手社員に限らず、社員各自が「今月の目標」を設け、作業や安全への意識を高め、業務に取り組んでいる。

こうした安全対策を通じて、平成22年までの33年間にわたり、無事故無災害を継続してきた同社。同年3月に小さな事故が発生し、その記録は残念ながら途切れたが、現在まで再び3年間（取材時現在）、無事故無災害を続けている。安全対策を万全にすることで、

事故災害を抑制し、無事故で計画どおりの工期で工事を完了させる取り組みは、大手建設会社からの評価も高い。今後もさらなる安全強化と人材育成を図っていく考えである。



注意事項の「見える化」と災害報告の周知



バックホウに乗り死角を体験。特に後方が死角となる

